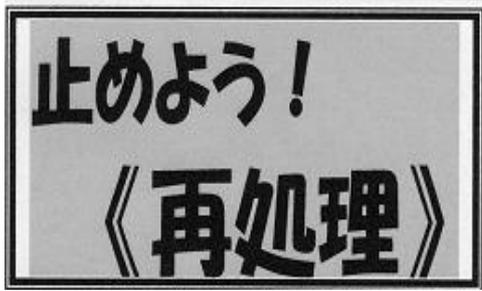


三陸の海を放射能から守る
岩手の会
ミニコミ通信 第17号
ホームページ
(岩手の環境 / RI廃棄物 / 再処理)
郵便振替 02240 - 5 - 102650



2006(平成18)年
3月31日
編集事務局 S.Oshida
電話・ファックス
019-623-1636

激しい憤り、ついに試運転開始

各地から抗議の声 運動はこれから

試運転の中止と環境調査の徹底を訴える

三陸の海を放射能から守る

岩手の会、守る会が 声明発表



声明を読む永田文夫世話人

誰が決めた？
年度内 強行の日程

三月二十八日、久慈と宮古で、駆け足で通り抜けるように、短時間の一方的な説明会を開催した(株)日本原燃は、二十九日、青森県知事、六ヶ所村長と「安全協定」を締結し、三十一日午後、試運転(アケティブ試験)の作業を開始しました。
「海に放射能を流さないで」と各地から懸命に声を挙げた岩手

県民を無視したやり方に、激しい憤りの声があがりました。

沿岸市町村長ら

不満と抗議の声

沿岸十五市町村長が住民説明会を要請しましたが、二十九日、熊坂義裕宮古市長と三上敏義会議長は、「十分な説明がなされるまでは安全協定締結はもちろん試運転はやるべきではない」として、(株)日本原燃と青森県知事へ抗議文を送りました。

県漁連大井誠治会長も「放射性物質を海中に放出して薄めるのが気になる。海底に住む魚もおり蓄積されないか心配である」と所感を述べました。

豊かな三陸の海を守る会、試運転中止を

申し入れ

沿岸漁民や消費者で

平和環境労組センターが抗議打電 集会

平和環境労組センター

「砂金文昭議長」は二十八日、原燃の岩手県民を無視した形式的な説明会に抗議し、各地区での説明会を要求する職場単位の打電行動を行いました。同日夜六時から岩手教育会館に約百人をあつめ、「六ヶ所再処理工場を考えると、講演会を行いました。」

各地で説明を求める声

二十八日、宮城県本吉町森琢男町長、気仙沼市鈴木昇市長、唐桑町佐藤和則町長は、連名で、村井嘉浩知事に対して「青森県と日本原燃に、宮城県民にも早急に説明することとする要請書を提出しました。いわて生協 池田和昌理事長は二十八日、日本原燃に対して、盛岡など県内数力所での説明会追加開催、消費者の理解がないまま試運転を行わないという二項目の要望書を郵送しました。

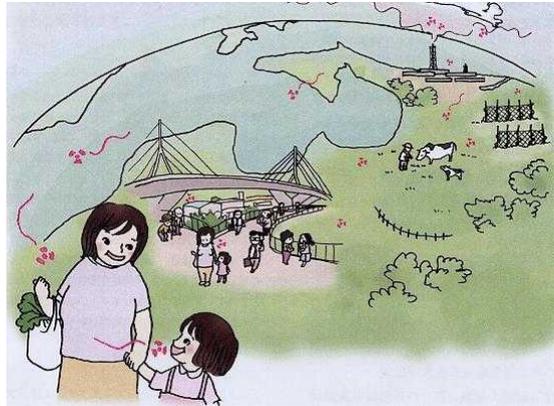
盛岡市長は三月十日「岩手の会」からの盛岡での説明会開催要望を受け、岩手県へ送りました。

放射能から守る岩手の会も試験強行に抗議の声明

「三陸の海を放射能から守る岩手の会」(永田文夫世話人)は、三十一日午後、県庁において「久慈・宮古の説明会は説明責任を果たしてはいない。再処理試験強行は岩手県民への暴挙であり中止を求める」とする抗議文を発表しました。

疑問がさらに深まった原燃説明会

やはり子どもや赤ちゃんが心配だ!



をしました。「始めに安全判断ありき」の態度に驚きの声があがりました。

質問2 経口致死量四万七千人分の多量の放射能を本当に流すのですか？

「原発一年分を一日で出す」といつがどうか」といつ質問に、原燃担当者「核種ごとのエネルギーで計算すると多くはクリプトンやトリチウムなのでそれほどでもない。トリチウムは久慈川の水と同じで拡散してしまふ問題ない」と答えました。これは「とんでもない話で、トリチウムは蒸留しても放射能は消えません。事業「申請書」にいつ「トリチウム放出、一年間に一・八×十の十六乗ベクレルは膨大なものです。半減期が十二年でベータ線を出し無害になるまで百二十年以上もかかります。海水から、海藻や魚の構成原子に取り込まれた(有機物)場合、それを食べ

ると毒性は水で摂取するよりも数倍増加します。

更に原燃は「セラフィールドでは一九七〇年代の放出に比べて十年で十分の一ずつ減らしてきた。六ヶ所工場はそんなに出さない」とも答えました。しかし、イギリスでは一九七〇年代に特に大量放出しましたが、その放射性物質は海底に沈殿し、現在、どんな溶け出して被害を拡大させています。六ヶ所の四万七千人分の経口致死量が微量であるとは決して言えません。放出放射性物質が沈殿蓄積され、将来溶けだし被害を与えるという観点が抜けています。

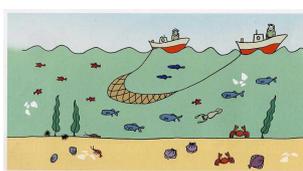
質問3 工場周辺では自然放射能よりも低いと想定していますが、どのような計算によりですか？

案の定、原燃は「六ヶ所工場周辺では、年間0.022ミリシーベルトである」と繰り返して、計算根拠も示さず「自然放射能より低い」としました。

高い煙突や長い放出口から遠くへ飛ばすので

すから、足下の工場周辺は、値を低く計算出来るかも知れません。しかし、海底に人が近づくことも危険な放射性物質を放出していても、陸上では放射線値が低いといっているのであり、安全の証明にはなりません。胎児や子どもへの影響などの説明もありませんでした。

手持ちの測定器を実際に使用して、自然にも放射能があると強調していましたが、再処理工場の放射能は人工のもので、人の放射能の多くは特定臓器に濃縮し集中被ばくします。自然放射能と同じのもので、その放出濃度は自然とは比較にならない高濃度です。



質問4 5三陸海域の環境評価をなぜやらないのですか？ 監視体制はどうなっていますか？

これについて原燃は

「一年間の総量規制を設定している」「六ヶ所村周辺の陸上、海水、魚、昆虫の測定を行い発表している」「岩手県は、遠いのでこの測定値より低いはずである」などと説明しました。

原燃のいう「総量規制」としても「事業申請書」にいつ「年間四万七千人分の経口致死量」が「原燃自身の目標値」としてあるだけで、原燃の「規程」があるわけではありません。

「環境測定」についても陸上観測が主で、海上、海中の測定場所が不明です。トリチウム測定は濃縮しなければ行えず、難しいものです。遠く三陸に「チゼンクラゲ」のように漂ってくることも全く考えていないようでした。

質問6 被害が出た場合の補償は？

宮古会場では、補償問題について漁民が発言を求めていたのに、司会者は「時間切れを理由に打ち切りました。ヤジと怒号が飛び交ったのは当然のことでした。(尚)

駆け抜けるようなあわただしい日程設定の、たった二時間、二箇所の説明会でした。詰めかけた約九百人あまりの漁業者や議員らは、安全であると確信出来たのだろうか。聞きたかった事、確かめたかったことを整理してみると・・・、疑問はさらに深まるばかりの説明会でありました。

質問1 セラフィールド周辺で小児ガンが十倍に増えたといいますが本当ですか？

宮古の女性が聞きました。原燃の回答は「放射能の影響と因果関係は証明されていない」といつものでした。

東京理科大の久保寺晶子名誉教授は「セラフィールドの現地を訪問し、高校生との交流会などをとおこなったが、放射能の心配は話題に出なかった。(だから)安全です」といつような趣旨の発言